

大地震に耐える建物の安全性を支える研究

事前に診断できる基準とは

熊本地震以降、耐震対策に大きな関心が寄せられています。1981年に法律が見直され、耐震構造の技術も高度化しました。柱や梁が強固でも、それらの接合部が破壊されてしまえば建物全体が倒壊する恐れがあり、建築工学の分野では、巨大地震でも壊れない接合部を実現する研究が進められています。私は建物の接合部が破壊される危険性を、事前に診断できる基準づくりを研究しています。近年の建築材料は、厳しい検査をパスしているため、一目で分かるような欠陥はめったにありません。外部から見えない溶接内部の欠陥や、経年劣化による金属疲労などが、接合部破壊の原因となります。また、鉄は一定以上の力が加わるとグニャリと曲がる性質を持っており、伸びしろを前提に耐震設計が行われています。そのため被害を最小限に食い止めるには、どの方向にどれくらい揺れたら壊れるかを正確に判断することが大切です。建築工学の研究を深めることで、正確に判断できる耐震設計の基準づくりを世界中に広め、安心できる建物づくりを支えていきたい！

工学部 建築学科 **東 康二** 教授



崇城大学

SOJO UNIVERSITY

薬学部	生物生命学部	工学部	情報学部	芸術学部					
薬学科	応用微生物工学科	応用生命科学科	機械工学科	ナノサイエンス学科	建築学科	宇宙航空システム工学科	情報学科	美術学科	デザイン学科

〒860-0082 熊本市西区池田 4-22-1

問い合わせ(入試課直通) TEL:096-326-6810

そうじょう大学 [検索](#)